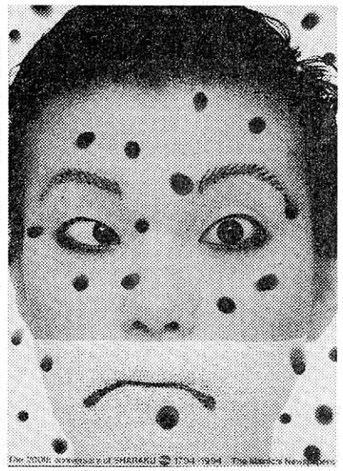
ワルシャワ・ポスター展で金賞

水谷孝次さんに聞く



受賞作「現代の写楽」

世界で最も権威のあるポスターコンクールとして知られるワルシャワ国際ポスタービエンナーレでこのほど、日本のグラフィックデザイナー、水谷孝次さん(45)が最高賞の金賞を受賞した。阪神大震災への支援を呼びかけるポスターを自主制作するなど社会貢献にも積極的に取り組む水谷さんに聞いた。【石川　健次】

水谷孝次さん

このビエンナーレは今年で15回目を数える。過去に日本からは亀倉雄策、福田繁雄さんら国を代表するデザイナーが金賞を受賞、世界に日本のグラフィックデザインの優秀さをアピールすると同時に、デザイナーが世界に雄飛する格好の機会ともなっている。

思想、文化、広告の3部門に分かれ、水谷さんは文化部門で受賞した。受賞作は「現代の写楽」。昨年、江戸の浮世絵師、写楽へのオマージュとして開かれた展覧会「グラフィック写楽67人展」に出品するために制作したポスターで、モデルとなった友人の女性が目やまゆ、口を写楽が描いた浮世絵の特徴そのままにポーズしている。

昔も今も、日本からの応募は圧倒的に商品などの宣伝ポスターを対象とする広告部門が多く、イデオロギーや政治的テーマなどにかかわる思想部門、演劇や展覧会など文化的催しのために制作されたポスターが対象となる文化部門への応募は極めて少ないという。

「商業主義をあおるポスターの応募ばかりで海外から冷ややかな目が注がれているとも聞きます。今回、思想部門でも反核を訴えたやはり日本人の作品が金賞を受賞しました。従来にない傾向で、だからこそ受賞の意義も深いのではと思います」

昨年の阪神大震災は水谷さんにも大きな衝撃だった。何かしなければとの思いにかられたが、デザイナーという職業の非力さも思い知った。あえてデザイナーとしてできることはと考えた末、震災の教訓を忘れないためのポスターの制作を決意。震災の惨状を撮った写真をもとに作ったポスターを都内の電鉄会社と交渉して駅構内にはったほか、販売して収益金をすべて寄付した。ポスターの制作費など実費数百万円は自腹である。

「かっこよく聞こえるかもしれませんが、本当はそうほめられた人間でもないんです。バブルのころはどんどん仕事が入ってきて、1日に10枚のポスターをデザインしたこともあります。今思うと仕事が雑になることもきっとあったでしょうね」

バブルのあと仕事が減り、今はピーク時の半分程度とか。その分、時間に余裕が生まれ、いろいろ考えるうちに大いに反省したのだそうだ。

「私もバブルに酔った一人でした。日々生まれ、消えてゆく商品のために汗を流し、その分お金も入ってくるからそれでよしとしていた。果たして人の記憶や歴史に残る仕事をしてきただろうか。感謝される仕事をしてきただろうか。今回の受賞はその意味で大変うれしい」

大学では電子工学を専攻し、デザインはほとんど独学という。今回のビエンナーレでは広告部門でロシアのデザイナーが金賞を受賞した。思想、文化は東側、広告は西側というかつての図式は過去のものになったのだろうか。

「東欧は今、過渡期なんです。社会主義の時代は国からお金をもらい、極端に言えば1年に1点作ればよかった。今はジュースや車を売るためのポスターをせっせと作らなければ生活できない。東欧が果たしてきた役割を、今後は日本のデザイナーが引き受けなければならないということなのかもしれません」

日本のグラフィックデザインも転機

思想や文化面での貢献を